

# 法然をめぐつて（一）

——中里介山・内村鑑三ノート——

小 畑 進

中山介山の法然

①「日本に於て、本當に一宗教を創立したものは法然の外に無い、といへば定めて異論が簇出することであらう。」

文豪・中里介山の歴史的名著『法然』冒頭の書き出しです。その三一九頁にわたる法然帰依の文字は今日なおその輝きを失っていません。その熱い法然思慕の念を紹介を兼ねてまず聞くことに。

「徳川期以後に起こった黒住とか金光とか、天理、丸山等の民衆教は別として、日蓮までの日本佛教の中に祖師と仰がる、幾多の巨人がある、それを宗として日本獨特の佛教が起つてゐる、いづれも其の創立者

を度外して、その宗教を語ることは出来ない、法然一人が一宗教の創立者であつて、法然以外には、宗教を創立した者はないと断言することは、多大の反論を豫期してか、らねばならぬかも知れない。しかも、事實は、たしかにさうである。<sup>②</sup>」

三論の慧灌も、法相の道昭も、天台の最澄、真言の空海、臨済の栄西、曹洞の道元、黄檗の隠元、みな中国各宗の伝達者であつた。

なるほど「法然」にだつて、「五祖」が居たではないか、といわれるかも知れないが、むしろ、法然あつて善導あり、五祖ありといつてよからう。伝教、弘法、栄西、道元らは中国に渡つたが、法然は渡らなかつたとして、むしろ、中国の善導は、法然という大船の水先案内者であつた。法然あつて善導あり、と。そして、眞の創立者は、また革命家であるとして、

「一体、何の方面でも創立者といふものは皆、必然的に革命家であるべき筈のものである。人類始まつて以来イエス・キリストほどの革命家は無いと云ふ人がある。…もし革命家でない創立者があるとすれば、それはニセ者である。」<sup>③</sup>

しかも、

「日蓮の如きは、盛に怒罵叫喚しつゝ、實は愛着が断ちきれないで男泣きに泣いてゐる者、法然は表に殊勝な温顔と、口に哀々たる念佛を唱えへつゝ、その手は、一切の過去をぬり潰し、かき潰し、拝みつぶし

てしまつてゐる。怖るべき事だ。」<sup>④</sup>

と感じ入る。次いで、法然の宗教的人格について。

「けれども、かうして、慈悲圓滿の、謙遜卑下の他力本願の圓相のうちに、身の毛もよだつ怖ろしさを見て取るのは宜しいが、それによつて、この偉人が、山師であり、横着者であり、野心家であることに凝滞さしては、飛んでもない邪道に陥る。法然ほど、本當の宗教家の素質を備へ、本當に宗教的に生き得た人間は、ほとんど無い。彼は見やうによつては底の知れない横着者であるけれども断じて偽物とすべき理由はその痕跡でもない。

その入信の動機より、出家の経路、煩悶より得道、一宗一門開創に至るまで、その名の如く全く法爾自然で、無理といふものは少しもない。彼は天成の平民的求道者であり、宗教的偉人である。有ゆる扮飾を彼の周囲から洗ひ去つても、古来、日本に於いて、彼ほど宗教家らしい宗教家は無い。彼は一宗の創立者であるのみならず、日本のすべての佛教を南無阿弥陀佛で統一してしまつてゐるともいへる」<sup>⑤</sup>

忌憚ない介山の法然敬仰は、その平民性に及ぶ。

「彼の特色の一つは終生平民僧であつたことである。平民僧たることは難くはない。ただ平民僧であつて帝王・宰相の師となり、同時に盜賊・遊女の師となり得て、その間に少しの無理矯飾も無かつたといふ大きさが他に類例の無い處である。彼は殊更らに不拜王侯といふやうな見識を見せた事はない代り、法縁あ

つて招かるれば、いづれの處をも辭せざる平常心と、教を聞かんとするものには所謂人倫の外の者とも快く膝をまじへて諄々たるものである。

愚痴の法然房、十悪の法然房は、斯くして終世、僧位僧官の何物もなく、墨染の衣を纏ひ、金剛草履を引づつて、流罪の時の外に輿にも車にも乗らずに、さつさと、法縁ある處に赴く、一切の法をよくよく学すとも一文不知の尼入道のともがらに同じて……といふのを、身に引當て、の矯飾と誰が見やう、われ『知慧第一』と称せらるゝ、と雖も、その知慧や何物、佛海の濱の砂の一つにも足らず、彼れ、無智と雖も、道を学ぶの謙虚心深きこと海の如くなる故に、度生の船を浮ぶるに足りぬべし、智は限りあり、愚は限りなし、詮じつむれば愚痴の法然房、十悪の法然房、一時に處して、終生凡俗として、惴々焉として籬に添うて走るの謙遜を失はなかつたと見てよろしい。<sup>⑥</sup>次に、そのエリートぶりについて、

「もう一つ、彼の特色としては、その生ける時代に於いて、当時の第一人者として、絶對的に許されてゐたことである。宗教の開祖、或は一代の改革者には概して逆境者が多い。識見が高く、器が清過ぎるか、大き過ぎるかの為に、その時代から嫉視虐待を蒙り、漸く自家の地盤を得るまでには、血みどろの悪戦苦闘を経來つて後といふことが、ほぼ型の如き例となつてゐるが、法然に至つては、最初から全然、この苦味を嘗めてゐないといふことは一奇である。のみならず、時代の絶對的寵兒として養はれ來つたことも不思議といへば不思議である。山にありては秀才の名を擅にし、朝に出で、は智慧第一の名を博し、教を弘むれば貴賤男女相踵いで門に群がり、嫉妬排擠の中心たるべき周囲の宗教界に於てする、その故老先輩が争つて席をゆづり、どの方面から見ても、居然として第一人者の地位と実力とを與へられてゐる。

斯くも順境なる開宗者といふものは、世界のいづれにも無からうと思ふ。これ一つは其の出身が、叡山といふ當時の官学の權威所にゐて、そこで養成されたから、叡山そのもの庇護が後ろにあることも一つの有力な理由に相違ないが、最も最大の理由に最初から彼の器が大き過ぎたからである。『智慧第一』の刻印を與へられた法然房の第一加減が全く超然的で、誰が倒さに立つても争ひ難さほどに離れてゐたから、嫉妬と批評の棒が届かない、単に智慧が優秀であるのみならず、その全體の輪廓が餘りに大き過ぎ、容量が豊かさ過ぎたから、時代はその本質を吟味するより先きに、先づ其の大きさを仰ぎ、豊かさを讃めずにはゐられなかつたのである。左様、その一代は、ほとんど法然の大きさの輪廓を見るだけに一生涯か、つた。その本質に觸れ出して、『これはたまらぬ』と騒ぎ出したのは法然が死に近い時分の事であつた。漸くにしてその巨人に一代が欺かれ(?)てゐたことを覺つて、あはて出したのは晩年から死後に至つて漸く深刻を加へて來つたのである。その晩年を除いて、生ける間には最大栄光の席を設けて置かれた。

その人が晩年及び死後に至つて、はじめて、世の常並の開祖教主の受くべき當然の運命に見舞はるゝに至つたのは是非もあるまい、実に生ける間に、この生前三代の帝王の師となつた大師が、骨を置く處さへ無く、遺骸をあちらこちらとかつぎ廻り、隠し廻つて、さまようといふ何たる悲惨の事か、人の子は枕する處なしと、キリストはなげいたが、法然はこの死の遺骨をすら置く處が無かつたのである。彼の時代は、七十年の間、彼の革命性の如何に抜本的なるかに気がつかなかつた。<sup>⑦</sup>」

以下、教化の多方面について、天子、法皇、皇后、中宮、門院、關白、公卿、武士、商人、土民、盜賊、娼婦に至るまで新しく教を説き得たとつづくのですが、法然一代頌徳碑ともいふべき中里介山の一文でした。

「法然は、疲れ、忘れ、喘ぎ、走り、呪ひ、怒り、昏迷轉々の時代の首をとらへて、西に向け、彼處に汝の樂土がある。彼處に汝の親がある、彼處をのぞんで、親の名を呼んで見よ、どうして、汝が救はれずにゐるものかと、八十年の生涯を絶叫して、幾千萬の人間に教へた。人類の世界の前世と未來を通じて、本當の宗教家らしい宗教家、本當の僧らしき僧としての法然、彼は容易に其の最大最偉の地位を下るものではない。」<sup>⑧</sup>

筆者も、聖徳太子を別格として、峻鋭質實なる最澄と、圓滿清楚なる法然の兩人を、日本佛教史上もつとも尊敬する者の一人ですが、『大菩薩峠』の巨匠の文詞は机童之助の斬れ味でした。ことのついでに、法然と親鸞、ひいては日蓮についての介山流評言もとどめておきましょう。

「法然の法脈を継いだ者のうち、其の色彩の最も鮮かなのは親鸞と日蓮である。後の浄土宗門より言はずれば、親鸞の存在と地位とは大きな問題となる。然し親鸞が自ら最もよき法然の門弟であるといふことは自分が證明してゐる。親鸞自身はよき人法然上人の教へに従ふ忠実なる一門弟であることの外に自ら一宗を立てようとか、異義を唱へようとかいつた形跡は更々無い。

それがやがてどうかすると法然よりも大きな存在にせしめられてゐるといふことは何の力か、何の細工かよく判らない。然し親鸞が法然の最もよき弟子であることは自分が證明してゐるに間違いない。

それに反して法然よりは数十年の後に生まれただけでも法然をまともな敵として討て出でた日蓮、それが矢張り法然の門流である、といふことは奇怪であらう。日蓮を法然の門流と言ひ、逆弟子であるといふことは言へないにしても、日蓮なくとも法然は在ったが、法然無くして日蓮は有り得ない、見様によつて

は法然の餘弊を救はんが為に逆説說法を以て日蓮が現はれ、法然の南無阿弥陀佛の一本槍を借用して日蓮は南無妙法蓮華經の旗印としたものと見られる。

弟子は師にまさらずとは言はない、後輩であるから先輩より劣るといふ限りはもないが、宗旨宗旨としての觀方は別、歴史的存在としては親鸞と日蓮は法然の門弟であり後輩である範圍を出ることは出来ない。繰返して言へば、親鸞と日蓮無くても法然は有り得たが、法然無ければ此の両者の宗教は全く有り得ない。尚例へば、恵心や善導無くても法然は必ず自己の宗教を作り得た人であるが、親鸞と日蓮は法然無ければあの宗旨の存立の原動力が失はれる。親鸞と日蓮とは、廣く法の運用より見れば法然を體としての兩翼であり、歴史的輪廓よりは、法然を中心としての脇士の地位に見るのが當然であらうと考える。」

法然の伝記・評言数多ある中に、これら介山の文章は法然の体温をうつすごとく出色と思われれます。

#### 内村鑑三と法然

ここで、キリスト者の法然觀に転じましょう。まずは「内村鑑三」です。内村は晩年にいたるほど浄土教を重く見るようになったと言われます<sup>⑩</sup>。

「日本にも大なる信仰家が在った、法然の如き親鸞の如き止さに其人であった、彼等が佛教徒であったのは、彼等の時代に佛教を除いて他に宗教がなかつた故である、吾等は彼等が佛教徒なりしとの故を以て彼等を軽視すべきでない。

信仰の何たる乎を知りしことに於て彼等は現今の欧米の基督信者よりも遙かに深くあつた、彼等が弥陀に頼りし心は、以て基督者がキリストに頼るべき心の模範となすことが出来る、彼等は絶対的他力を信じた、則ち恩恵の無限の能力を信じた、彼等は全然自己の義 (self-righteousness) を排して弥陀の無限の慈悲に頼つた。

本願を信ぜんには他の善も要にあらざり、念佛 (信願) にまさるべき善なきゆゑに悪をもおそるべからず、弥陀の本願を妨たぐるほどの悪なきがゆゑに。

親鸞の此の信仰に勝ざる信仰はあるべからずである、ルーテルは之を聞いて喜んだであらふ、「アーメン、実に然り」と彼は言ふたであらふ、而して今の欧米の基督信者は斯くまで大胆に言ひ断るの勇氣を持たないのである、彼等は神を余りに恩恵ある者と見るの結果として人が憚からずして悪を為すに至らんことを恐れるのである。乍然、是れ無益の心配であることは人類の信仰史の証明する所である、神の恩恵が人の罪惡に勝つてのみ眞の救済はあるのである、親鸞は此大胆の言を放つて信仰の奥義を語つたのである。日本国に既に此信仰が在つた、我等は信仰の事に関しては必しも之を欧米人に学ぶの必要はない、吾等は法然の『撰択集』に於て、親鸞の『歎異鈔』に於て、又は覺如の著なりとして伝へらる、『安心決定鈔』に於て、深き貴き信仰の原理を見るのである。

斯く言ひて我等は寺院化せる、「死者を葬る死者」と化せる我国今日の佛教に帰依せんと欲するのではない、我等は今や此国に於て佛教を見ずして佛教の死骸を見るのである。然し乍ら死骸の残存るは其内に會て一度は澆滅たる生命の働いて居たる何よりも良き証拠である、歴史は其れ自身を繰返すと言ふ、同じ生命を供して同じ活動を起し得ない理由はない、更らに刺激的なる、更らに合理的なる、而して明らかに歴史的なる信仰を以てして彼等が奮起勃躍しない理由はない。



然り、信仰なる哉、而して日本人は七百年前の往昔より既に此の貴き信仰を有つたのである。」<sup>⑩</sup>

「そして佛教に基督教に似たる多くの点がある。浄土門の如き基督教の佛教化したる者である乎の如き観がある。真言宗はネストリヤ派の基督教に佛教の名を付したる者に過ぎないとの説を立つる西洋の学者さへある。斯かる次第であれば日本に於ける佛耶両教の融合は望なき事業でない。既に在る佛教を基督教と成すを得ば、是れ日本に於ける基督教伝道の最善の途であつて、我が同胞の教化を願ふ者は何人も賛成すべき事業であると。爾う唱ふる人が今日まで幾人もあつた。そして今猶在る。此は甚だ人を引付ける企図であつて、最も耳寄りな話である。

然し乍ら事實はさう容易くないのである。我等は佛教对基督教に就て佛教学者の側より多くの事を聞かされた。曰く佛教は無神論であるに対して基督教は有神論である。縦しまた佛教が神に類する者を認むるにしても、その印度宗教たるの本質に違はずして万有神教であつて、基督教は神が人を救い給ふ宗教である。佛教も他力を教へないではないが、それは釋迦の本来の教ではない云々と」<sup>⑪</sup>

もつとも、これより前には次のような発言をしていました。

「若し圓滿たる哲学として見るならば佛教はたしかに基督教以上である。基督教に多くの思想上の矛盾がある。神は愛すると共に怒り給ふと言ふが其一である。基督教は自力教でもなければ亦他力教でもない。厳格なる道徳を要求すると共に信仰に依る罪の絶対的赦免を宣言する。基督教を一貫せる倫理組織として見ることは出来ない。哲学的に見たる基督教は甚だ不完全なる宗教であると云はざるを得ない。

然らば基督教の価値は何に於て在る乎と言ふに其能力に於て在る。基督信者は佛教信者と議論を闘はして多分負けるであらう。然れどもキリストに学びし者に佛陀に学びし者無いものがある。人類に対する熱愛がある。世を避けずして之と闘つて勝たんとするの勇氣がある。彼は事物に対して冷静なること能はず、悪を憎んで善と親しむ、彼に打消す能はざる希望がある。彼は罪の此世が神の能力に由り化して天国と成るを信じて疑はない。故に彼の口に讚美の歌が絶えない<sup>13)</sup>」

前の一文はこれより数年後で、その間、内村の佛教觀が進んでいることがわかる。

内村は自力・他力の語と意味は佛教に由来するからキリスト教に当てはまらないとしながらも、宗教を自力宗と他力宗とに分け、前者として儒教・神道・回教・ユダヤ教を挙げ、後者としてキリスト教・浄土門を挙げています。とりわけキリスト教を絶対的他力教と見ます。

キリスト教は自力か他力かと問われれば、自力宗でもなく、他力宗でもない。「他力にして他力に非ず、自力にして自力に非ず、自力他力の両勢力を以て己が救を全うする道…自力でも可い、他力でも可い。或は自から努め、或は神に助けられて、兎にも角にも救はれて死にたる者の甦りに与からんことを」とも言ったりしますが、これは救いがひたすら神の恵みによるとともに、救われた者は聖められて神の戒めを実現して行くという二面を反語的に語ろうとしたものでしょうか。<sup>14)</sup>

以下、内村節ともいべき文言を。

「我が信仰の友は惟りルーテルに限らない、英国のウエスレーに止まらない、米国のムーディーを以て尽

きない。我国の源信僧都、法然上人、親鸞上人も亦我が善き信仰の友である。∴臨終の時までに一向妄念の凡夫にて有るなりと思ふて念佛すれば浄土に参るべし、と言ひ、また、

浦やましいかなる空の月なれば

こゝろのまゝに西へ行くらむ

との一首に其本懷を云表はせし源信は確かに我が信仰の兄弟である、彼の言を聖書の言に訳して之を我が信仰の表白となすことが出来る。

有名なる法然上人の『一枚起請文』は古今東西を問はずすべて信仰に由る救済を信ずる者の敢て以て信仰告白となすに足る者である。曰く、『念仏を信ぜん人はたとひ一代の法を能々学するとも、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同じて智者のふるまいを為すして只一かうに念佛すべし』と。

是れ、『智者安くにある、学者安くにある、此世の論者安くにある、神は此世の智慧をして愚かならしむるに非ずや、世人は己の智慧を恃みて神を知らず、是れ神の智慧に適へるなり、是故に神は伝道（キリストの福音）の愚かなるを以て信ずる者を救ふを善しと為し給へり。』とある聖書の言に類する者である（哥林多前書一章廿、廿一節）、若し法然をして今日に在らしめば彼は禁じ難きの渴仰を以て新約聖書を迎へたであらふ。

誰か信仰の自由を愛する者にして親鸞上人を愛せざる者あらんやである、彼は常に曰ふた『親鸞は弟子一人も有たず』と、其故如何となれば、『如来の教法を十方衆生に説聞しむる時、ただ如来の御代官を申しつるばかりなり、更らに親鸞めづらしき法を広めず、如来の教法を我も信じ他にも教へ聞かしむるばかりなり、其ほか何を教へて弟子といはんぞ』。

故に彼は彼の弟子を呼ぶに御同朋、御同行の敬称を以てしたとの事である、『弟子』の稱たる、是れ墮落

せる寺院と教会との用ゐる所であつて、パウロであれ、親鸞であれ、真に信仰の何である乎を知りし人の諱んで用ゐざりし辞である、『我はただ如来の御代官を申しつるばかりなり』との親鸞の言に比べて、『我等召されてキリストの使者となれり……我等キリストに代りて汝等が神に和らがんことを汝等に求ふ』との使徒パウロの言を読んで、我等は二者が各自其救主に対し同一の態度に出し者なることを認めざるを得ない。

言辞を共にする者が我が信仰の友ではない、信仰の目的物に対し心の態度を同うする者が我が信仰の友である、神と称び、キリストと唱へ、天国と言ふ者にして、我が信仰の敵が尠くない、之に反して弥陀と稱び、如来と唱へ、浄土と言ふ者の中に、我は我が信仰の友を見るのである、我は勿論今に至て我がキリストの福音を去て佛教に帰せんとはしない、然れども我は基督信者たるの故を以て、神が我国に遣ひ給ひし多くの信仰たるの故を以て、神が我国に遣ひ給ひし多くの信仰たるの故を以て、神が我国に遣ひ給ひし多くの信仰の戦士を認めざらんと欲するも能はず、我は日本人である、故に情に於てはルーテル、ウエスレー、ムーデーイに対するよりも、源信、法然、親鸞に対しより近く感ずるは止むを得ない、我は彼等が弥陀を慕ひし其心を以て我主イエス・キリストを慕ふ者である。

夏ころもひとへに西を思ふかな

うらなく弥陀を頼む身なれば

の源信僧都の一首は、移して以て我がキリストを頼むの心を歌ふに足る、我は我が国人の中に斯くも懐かしき信仰を抱きし人の多く有りしことを歡び且つ感謝せざるを得ない。<sup>15</sup>」

では内村は佛教・浄土門とキリスト教との相違について何と言うか。片や一神教であり、他は万有神教で

根本の思想が異なる。片や自らが己を救うに對して、片や神が人を救う宗教である。他力佛教は釈迦本来の教ではないと言ふ。

「私の知る範圍に於て佛耶融合を唱ふる者は二教孰れをも深く究めない者である。マクス・ムラーやモニエー・ウィリヤムスの如き、佛教学者であると同時に強い基督信者でありし人は両教の融合の如き、思ひも寄らぬ事であることを主張した。……」

佛教基督教の相違は何処に在る乎と云ふに枚挙するに遑あらずと雖も、主として愛の觀念に於てある。

基督教に最も近いと称せらるゝ、浄土門の佛教に於いて弥陀の他力本願が唱へらるゝと雖も、之をキリストの十字架上の罪の贖と比べて其間に天地の差のあることを認めざるを得ない。弥陀の慈悲が慈悲の爲の慈悲であるに對して、キリストの愛は義に基づける愛である。基督教の神は義の神であつて、義に由らざれば人の罪を赦さず、義に由らざれば救を施し給はない。其意味に於て弥陀の慈悲は單純である。羅馬書三章廿五廿六節に於ける罪の赦しに關はるパウロの言の如き、佛教信者に取りて遠い、堪え難き言である。弥陀は曰ふ『赦す、赦す、我は汝を拯けずしては止まずと言ふ其請願を信ぜよ、而して救はれよ』と。基督教の神は言ふ『汝イエス・キリストを信ぜよ。然らば救はれん。信ぜざれば滅ぶべし』と。其故如何となればキリストに於てのみ神の義が完全に行はれたからである。救の目的は人をして義たらしむるにある。キリストの愛は義に拠る義の爲の愛であつて、嚴密なる義を離れてキリストの救は無いのである。

論より証拠である。佛教國に義が無いのである。有ても極く微弱である。愛と言ふは多くに『お情け』である。赦しと言ふは『勘弁である。』神は其義の故に『我等の罪を赦し給ふ』と言ふが如きは佛教信者に解し得ないのである。そして義が無くして國は亡ぶるのである。凡てが情実化して法律は其權能を失ふ

のである。佛教国に強健なる国家なきは此理由を以て説明する事が出来る。幸いにして日本には佛教以外に士道があつて、佛教の此大欠点を補い来りしが故に今日あるを得たのである。然れども佛教の感化が非常に強く、為に正義を愛するの念が弱くして、強烈なる西洋文明に接して社会国家の根底が揺るぎ出したのである。茲に於てか日本は今日イザヤ、エレミヤ、エゼキエルを以て始まり、イエスに至りて其絶頂に達せし神の教を痛く要求するのである。<sup>⑯</sup>」

もう一つ参考に、

「日本に於ても最も善き基督者は嚴格なる武士の家に起つた。『上のお情け』あるを知つて、道の犯すべからざるを知らざりし所謂町人百姓は、キリストの福音に接するも、唯愛の甘きを喜ぶに止つて、義の辛くして貴きに堪え得ない。其意味に於て純潔なる儒教と公正なる神道とはキリストの福音の善き準備であつた。伊藤仁斎、中江藤樹、本居宣長、平田篤胤等は日本に於て幾分にもバプテスマのヨハネの役目を務めた者である。之に較べて、佛教、殊に浄土門の佛教は、阿弥陀の慈悲を唱ふる事余りに切なりしが為に、却て神の義に基くキリストの福音を正解する上に於て多くの妨害を爲した。<sup>⑰</sup>」

とまで斬り込んでいたのです。

(つづく)

注

① 中里介山『法然』（昭和六年・三省堂）一頁。

- ② 同書 二頁。
- ③ 同書 五頁。
- ④ 同書 六頁。
- ⑤ 同書 六、七頁。
- ⑥ 同書 七、八頁。
- ⑦ 同書 九、一〇頁。
- ⑧ 同書 一二頁。
- ⑨ 同書 三二八、三二九頁。
- ⑩ 同書 峰島旭雄・芥川博通編著『近代の法然論』（みくに選書、一九八二年。）一二頁。
- ⑪ 内村鑑三「我が信仰の祖先」（『聖書之研究』一八二号、大正四年九月十日）
- ⑫ 内村鑑三「佛教対基督教」（『聖書之研究』三五一号、昭和四年十月十日）
- ⑬ 内村鑑三「基督教を解するの途」（『聖書之研究』二九七号、大正十四年四月十日）
- ⑭ 内村鑑三「二種の宗教」（『聖書之研究』一九二二・一。  
「自力と他力」（『聖書之研究』一九二九・一〇。）
- ⑮ 内村鑑三「信仰の友・源信と法然と親鸞」（『聖書之研究』一八〇号）
- ⑯ 内村鑑三「佛教対基督教」（『聖書之研究』三五一号、昭和四年十月十日）
- ⑰ 内村鑑三「キリスト教研究」（大正十一年十二月）

※へ参考文献〉『近代の法然論』一九九、二〇〇頁より。成沢光「内村鑑三と日本佛教」『内村鑑三研究（10）一九七八・四、渋谷浩「内村における選択の原理―柏木時代前期の集会論」同（5）一九七五・一二、吉田

久一『日本近代仏教社会史研究』「内村鑑三における二、三の問題」、小山宙丸「内村鑑三―その佛教観」  
峰島編『近代日本の思想と仏教』所収、参照。